

人権ニュース

2017年度No.1 47号 発行日2017. 6. 10

発行：日本キリスト教会人権委員会
〒662-0072 兵庫県西宮市豊楽町2-11
日本キリスト教会夙川教会気付
TEL / FAX 0798-74-0212

〈巻頭言〉

腐敗していく国へ

古賀 清敬

作詞家のなかにし礼氏は、自分は二度も国に棄てられたと新聞やテレビではっきりと語っておられる。戦時中の旧満州（中国東北部）で生まれ育った彼は、旧ソ連軍が攻めて来たときに関東軍が百数十万の住民を残して真っ先に逃げたこと。やっとたどり着いた避難先で、あとは各自の自由にするように、つまり国は面倒みないと言われたこと。また将校に命じられたとは言え、列車にすがりつく避難民の手をはがした自分の罪責を告白しておられる。それらが「人形の家」（すべてを捧げたのに捨てられた部屋の片隅）や、「石狩挽歌」（一時的に栄えるニシン漁、沖を通る「笠戸丸」は移民船）の隠れたモチーフになっているとも。

日本の3倍もある広大な満州に、その住民を排除して移民政策を行うこと自体が無謀であり、彼らの犠牲の上に安倍首相の祖父岸信介ら当時の「革新官僚」が軍部と財閥と共謀してぼろ儲けをしたのが実態である。

さて、その安倍政権は、特定秘密保護法によって実は秘密保護を担当する官僚を選別し、政権に従順な官僚だけが出世できる仕組みを作った。森友学園や加計学園問題で、なぜ保管すべき文書が処分され、あるはずの文書を官僚が出さずに政権をかばうのか。官僚は政治家に雇われているのではなく、国民全体の公僕との批判は当然であるが、この法律の悪い効果が出てきている点に注目すべきだろう。

さらに武器輸出の規制緩和で軍需産業に利益誘

導し、安保関連法で自衛隊の活動強化と予算の拡大を行い、共謀罪法案では政権批判をする国民を縛り、従順に飼いなされた人間を作ろうとしている。それらの最後の仕上げが憲法改悪で「美しい国」ができると思込んでいるが、それは不公平とウソが人間を腐敗させる果ての「死の秩序」でしかない。

他方、韓国や北朝鮮についての報道や論評が「上から目線」ばかりなのも気になる。とくに韓国民衆の民主的かつ平和的な政治参与を正しく評価せず、新しい政権が第一の当事者として北朝鮮とどのように向き合うのかを中心に据えるべきなのに、それを米・日・中はまるで無視してきた。武力か対話かではなく、南北の対話こそ最低限不可欠なのに、である。

このような状況の中で、わたしたちは、あくまでもひとり一人の「いのちと人権」の視点から、信仰と良心にしたがって判断し、行動していく必要がある。聖書に、「その預言に力づけられ、雄々しく戦いなさい。信仰と正しい良心とを持って。ある人々は正しい良心を捨て、その信仰は挫折してしまいました」（一テモテ1：18，19）とある。上に述べた事柄を単なる政治・社会問題として、信仰や教会と直接関係のないことと片づけるのではなく、他のすべての人々と共有すべき良心の問題であり、もし正しい良心を捨てるなら、あると思っている信仰も挫折してしまうと警告されていることを真剣に受けとめたい。（こが・きよたか、人権委員会委員長、北海道中会宣教教師）

北海道開拓期の 強制労働について

森下一彦

この人権ニュースが発行される6月の北海道は、一年で最も過ごしやすい季節を迎える。野山の木々はいっせいに青葉を茂らせる時期になる。長い冬が終わり、雪と氷に覆われた大地に初夏が訪れる。

私は北海道で生まれ、この大地で育ち、出身教会の北見教会に仕えている。しかし、自分が愛するこの地がどのような歴史を重ねて今日に至るのかを思うとき、冷静ではいられない。

徳川幕府はアイヌの人々に強制労働を負わせた。アイヌの人々は常に搾取され、利用され続けた。しかし、強制労働は明治以降の開拓期にも行われた。北海道には4つの強制労働の歴史がある。アイヌ、囚人、タコ部屋(監獄部屋)、そして強制連行されて来た外国人による強制労働の歴史である。暴力的な労働を課せられて、多くの人々の血が流された。開拓民達の労苦を偲ぶ前に、名前も残らない無数の命が犠牲になったことを忘れてはならない。

1879年(明治12)、内務卿(内務省長官)であった伊藤博文は、北海道に集治監(刑務所)の設置を明治政府に上申した。囚人達を北海道の開拓に利用するのが集治監が設置の目的であった。当地に送られた囚人の多くは、国事犯と呼ばれた者達が多く、秋田事件や群馬事件、秩父事件で収監された人達も多くいた。道内に五つの集治監が設置され、およそ8千人の囚人達が道内各地の炭鉱や鉱山、そして開拓民達が入植するための道路を開削した。

北見市内(旧端野町)には鎖塚という市の指定文化財がある。三つの小さな塚があり、塚の上には鉄球の付いた鎖が置かれていたという。網走集治監(現網走刑務所)の囚人が、道路開削の際に死亡し、道端に葬られた跡と言われている。鎖と鉄球は囚人達の足枷である。死後に外されて遺体に盛られた土の上に置かれたのである。

オホーツク海側の網走から内陸の旭川へ向う北見峠までの160kmの道は1891年(明治24)に開削さ

れた。“囚人道路”または“死の開拓道路”と呼ばれる中央道である。1,400人の囚人達が、早朝から夜暗くなっても厳しい労働を強いられ一日に15時間以上働かされた。原生林を切り倒し、二間(約3.6m)幅の道を築いた。なお、道には五寸(約16cm)の厚さで砂利が敷かれ、一日に170mを開削した。看守達は5月から11月までの7ヶ月間で中央道を開通させるように囚人達を強いた。12月になると北の大地は雪と氷に覆われ、道路工事が出来なくなるために急がせたのである。この結果、想像を絶する重労働と粗食により、212名(一日に一人)の囚人の命が奪われた。原生林の中での逃亡は不可能だった。見つければ皆の前で斬首された。開拓民が入植するために道を切開いたのは彼ら囚人達であり、多くの名無しの犠牲者が出た。

中央道の犠牲者は道端に葬られたといわれるが、実際に掘り起こされた遺骨は10体のみであり、今なお多くの犠牲者達が土中に埋められている。なお道路沿いには五基の慰霊碑が点在しているが、あまり知られていない。

中央道は現在も国道や道道として使われている。しかし、場所によっては利用されず、地図上でも確認できない箇所もある。また最近では高規格道路(旭川・紋別道)ができ、なおも工事が進んでいる。とりわけ北見峠付近は急勾配や急カーブの多い中央道よりも、新しく便利な高規格道路をみな利用している。また開削から百年が過ぎ、地域には過疎化の影が襲っている。人口の減少に伴いあまり通らなくなった箇所もあるが、中央道は多くの血が流された道路である。彼らの犠牲にどう答えれば良いのだろうか。

北見教会は高知教会(現日本基督教団)を母体とする北光社移民団の入植(1897年)によって築かれた教会である。しかし、この開拓者達が通った道路も中央道であった。信仰者達の入植の前に多くの犠牲がいたのである。

この地に住む者の一人として、開拓期の強制労働で犠牲になった人達の追悼式を数年前から行っている。同地域の人達にも呼びかけ、毎年30名前後の出席者と共に祈りの時をもっている。私は愛する北海道の過去を確りと見つめたい。愛する故郷の歴史であるがゆえに、大切な記憶として次代にも伝えてゆきたいと思っている。(もりした・かずひこ、人権委員、北見教会牧師)

「もみの木ボランティア」

活動報告

金田 聖治

東日本震災直後から、カトリック埼玉教区の方々も被災者支援に取り組んでいました。「何か手伝わせてもらいたい」と申し出て、私たちもその活動に加えていただきました。栃木、宇都宮松原の両教会が交互に月一回のペースで、いわき市内の仮設避難住宅に暮らす榎葉町、大熊町の人々と交流する活動に参加しつづけています。

避難指示は次々と解除され、保障も打ち切れようとしています。けれど震災も事故も収束していません。自己責任という名目で、ここでも国家は人と人とのつながりを分断し、民を踏みつけにし、棄て去ろうとしています。「息子夫婦や孫たちは戻らな

い。90歳の自分だけが独りで自宅に戻る」と話してくださった方。別の人は、「政府は福島第二原発を廃炉にするもしないとも言わない。恐ろしくて戻れない」。避難先を転々とし、先行きのメドも希望も見えにくいとても心細い毎日です。避難先の各地で子供たちがいじめにあったり、小遣いをたかられたりしているとTVニュースは伝えます。私たち大人の冷淡な心に子供たちも感染しているのかも知れません。避難生活を送る方々とわずかでも触れ合えたことは幸いでした。しかも、「隣人になるとはどういうことか出かけて行って学べ」「わたしが憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深くあれ」と私たちは命じられています。なによりも活動を通じて、この私たちこそが主から憐れみを受けつづけてきたこと、主が私たちのためにも隣人となってくださったことを改めて味わい知らされました。感謝があふれます。

(かねだ・せいじ、人権委員、上田教会牧師)

狭山現地調査学習会報告

石東 岳士

2017年2月27日(月)～28日(火)、第25回狭山現地調査・学習会ならびに第19次狭山再審・証拠開示要請が行われました。この活動は「狭山事件」の犯人として、いまなお見えない手錠がかけられている石川一雄さんの無実を信じ、無罪判決を勝ち取ることを目的としています。「狭山事件」は冤罪事件の一つとして社会的にも認知されている事件(4月22日、NHKのETV特集「獄友たちの日々」で取り上げられました)ですけれども、数ある冤罪事件の中で、特に「狭山事件」に人権委員会が関わるのは、それが部落差別問題に端を発しているからです。1963年5月に埼玉県狭山市で起きた女子高校生誘拐殺人事件の捜査を、警察は当初から被差別部落を中心に行ったのです。

2日間にわたる活動の内容は、1日目に学習会と石川一雄さんを交えての懇談会、2日目に現地調査、および東京高等裁判所への再審要請、東京高

等検察庁への証拠開示要請です。

今回の学習会では「狭山事件の再審を求める市民の会」が製作したDVD「冤罪を作り出す取調べ-狭山事件の場合」を見て、石川一雄さんがいかにして虚偽の自白に追い込まれていったかを学びました。そのDVDでは石川一雄さんは3人の刑事に取り囲まれ、自白を強要されるのですが、犯人でないため殺害に至る経緯や状況が全く言えておらず、刑事に教えられて自白させられているという様子が再現されていました。

再審決定に至るためには、石川一雄さんが無実であることを裏付ける新証拠を提出しなければなりません。弁護団は次々に証拠を提出してきましたが、中でも重大な証拠とされる「下山鑑定」が2016年8月22日に提出されました。石川一雄さんの自宅から被害者のものとみられる万年筆が見つかったことが、有罪判決の有力な根拠だったのですが、下山鑑定ではこれが被害者のものではなかったことを科学的に証明したのです。

事件から54年経ち、事件を知らない世代が増えている中で、この問題にねばり強く関わっていきたいと考えています。

(いしづか・たけし、人権委員、夙川教会牧師)

「マイノリティ宣教センター」紹介

Center for Minority Issues and Mission

小野寺ほさな

2017年4月8日、在日大韓基督教会の主導により日本キリスト教会館6階会議室を会場に「マイノリティ宣教センター」開所礼拝が行われ、金性済（在日大韓基督教会総会長、設立準備委員長）の「新たなセンターの歩みは、これから数々の荒波を経験するものであるかもしれない。しかし、主が共におられ、確かな岸へと導いて下さる歩みであるのだから、主の御業を信じて、舟を漕ぎ出そう」との力強いメッセージに押し出され歩み出しました。

センター設立への願いは、2015年11月18日～21日に「共に生き共に生かしあう日本社会に向けて一日本と世界の連帯でめざす日本社会の正義と共生」という主題のもと開催された第3回「マイノリティ問題と宣教」国際会議に遡ります。

この会議には、在日コリアン・移住者・アイヌ・沖縄・被差別部落・LGBTなどのマイノリティ、そしてWCC（世界教会協議会）をはじめ南アフリカ、アメリカ、カナダ、ドイツ、オーストラリア、インド、ダリット、フィリピン移住者、台湾、台湾先住民、韓国、世界の諸教会の代表者ら133名が参加し、ヘイト・スピーチの日本における現状と課題や世界的なゼノフォビア（外国人嫌悪）、ヘイト・クライムの課題を共有して、公正かつ包括的な多民族・多文化共生社会の実現に向けた話し合いがなされました。会議終了後には以下の共同声明（一部抜粋）を採択したのです。

「私たちは、教会に託された福音宣教の業を行うために、日本の諸教会に以下のことを呼びかけます。①日本社会における不正義を示すものとして、周辺化され排除された人々が経験する痛みを聞き、認識し、共有すること。②マイノリティのニーズや訴えを受けとめることを各教派の宣教方策として取りあげ、教派を超えてこれらの課

題を定期的に協議し、共に行動する機会を持つこと。③国内でのマイノリティ・ネットワークの構築に協力し、在日大韓基督教会が呼びかけている「マイノリティ宣教センター」の設置を目指して、諸教派による協議を続けていくこと。④日本国内の諸宗教

や市民団体との間で、マイノリティへの差別に取り組むための連帯と協働を進めること。」その後、センター設立に至るまで、まず在日大韓基督教会総会の承認、次に国際会議を共催したキリスト教諸教派、諸団体代表者によるフォローアップ会議、さらに2016年後半からのマイノリティ宣教センター設立準備会が積み重ねられました。

センターは理事会で運営されますが、現在の理事会は、在日大韓基督教会、日本基督教団、日本キリスト教会、日本聖公会、日本バプテスト連盟、日本バプテスト同盟、日本キリスト教協議会、ウェスレイ財団、在日本韓国YMCAから派遣された代表者で構成されています。また、各団体から運営委員（合計13名）が派遣され具体的活動の役割分担をし活動計画、実施に向けた協議が行われています。

具体的には「共生の天幕をひろげよう」を合言葉に、大きく以下4つの活動が展開されます。A.人種主義との闘い、B.ユース・プログラム、C.和解と平和のスピリチュアリティ開発、D.国内および海外諸教会への発信。Bについては、既に今年9月3日～6日に「第1回マイノリティユースフォーラムin大阪—私たちはひとりだ、でも孤独ではない」が、在日韓国基督教会館を会場に講演会や大正区のリトル沖縄、生野区の 코리아タウンの現場研修、そして「人類博物館」を切り口にワークショップなどが準備されています。（おのでら・ほさな、人権委員、荻窪北教会牧師）

「マイノリティ宣教センター」の活動を覚え、個人会員、また団体会員となってお支援下さい。

- 個人会員：年会費 一口 3,000円
- 団体会員：年会費 一口 10,000円
- 郵便振替口座 00160-6-487170 マイノリティ宣教
- みずほ銀行早稲田支店（普）2382724 マイノリティ宣教センター

辺野古・高江抗議ツアー



参加者の声

人権委員会では、日本キリスト教会諸教会・伝道所のみなさまに参加を呼びかけ、島田善次牧師、川越弘牧師の協力のもと、去る4月18日(火)、19日(水)に「辺野古・高江抗議ツアー」を開催いたしました。実際に抗議活動の現場に身を置かれた参加者のみなさまから、現場の声を届けていただきました。(執筆者はあいうえお順)

辺野古・高江抗議ツアーに参加して

新畑 信 (浦和教会員)

4月18日および19日、辺野古・高江を中心としたフィールドワークに参加した。私自身は、沖縄が抱える諸問題について学び、関心を寄せてきたつもりだったが、沖縄にゆかりのある人間ではないし、当事者になることは出来ないだろうと思いき、どこか傍観している節があった。

巷では、座り込みに来ているのは県外の人ほとんどだとか、酷い場合は日当をもらって参加しているとか、事実とは異なる指摘をされることがある。確かに、県外からの参加者もいるし、現地の人が多いというわけではなかつただろう。しかし、当事者でなければ、そこにいる意味はないのだろうか。加えて、座り込みをしても、機動隊による「ごぼう抜き」で、工事は前に進む。ならば、座り込むことに何の意味があるのだろうか。実際に抗議の現場に身を置いてみて感じたのは、おひとりおひとりのスピーチに象徴されるように、沖縄の尊厳が踏みにじられている、その痛みを皆で分かち、非暴力・不服従に徹することが中心に据えられているということだった。

想像を絶する沖縄戦を体験し、家族を亡くしたオバアやオジイ、沖縄戦で奪われた尊い命。銃剣とブルドーザーで土地を強制的に奪われた住民、愛着のある故郷をなくした人々。戦後も米軍基地があることで、性産業に従事せざるをなかつた女性たち。米軍人・軍属による性犯罪によって、亡くなられた女性たち。

挙げればきりが無いが、発しようにも発することのできなかつた声なき声が存在し、それらに呼びかけられて、私たちは集うのだと思う。高江住民の伊佐さんのお話「なぜ一人の少女の命も守

ることができないのか」と悲痛な問いかけがあった。「座り込み」は、声なき声への応答ではないだろうか。また、それらの声が聞こえれば、私たちには応答する責任があるのではないだろうか。『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい』(ローマ12:15)とあるように、先立たれたものらの呼びかけに応じて、私もまた当事者になることができるのだと思う。



辺野古・高江抗議ツアーに参加して

富田小夜子 (福岡城南教会員)

今回は、自分の信仰の貧しさと、怒りの薄っぺらさを改めて実感したツアーでした。近づいてくる機動隊に、隣の仲間とびったりと体をつけて腕を組み、脇を締めます。やがて、端にいる仲間から次々と担ぎ出されてゆきます。抗議の声のエスカレートする中、担ぎ出されるのを待たず、この場から逃げ出したいと祈ることも忘れ、怯えていました。今回の体験を糧に「み言葉を武具として、義のために戦う強さを与えて下さいますように」と祈り続けることができればと思いました。



「何事にも時があり」

コヘレトの言葉・3章

根上 朋子 (札幌北一条教会員)

4月17日(月)～19日(水)の3日間、大会人権委員会主催の「辺野古・高江抗議ツアー」に参加し、多くの事を学び、体験し、大会に連なる、

主に在る方々との出会いを通しお交わりが出来、大きな恵みの時を感謝します。昨年のツアーに参加したく、計画したのですが、初めての沖縄、諸般の事情で断念し、この事を「教会と国家委員会」の元長老・吉田雅子さんに話して居りました。今年1月末「ツアーにご一緒しませんか。」とお誘いがあり、“この時”を待つておりましたので即答し、参加の運びとなりました。辺野古ゲート前での抗議活動では、機動隊に連行され、涙が止まらず、組織の力の恐ろしさを体験しました。東村(ひがしそん)高江村では、ジャングルの森の前にテントが一つ、ヘリパット基地阻止活動をされている方からお話を伺い現状を知ることが出来ました。家も畑も、やんばるの森もブルドーザーで破壊され、耳をつんざく騒音と低空飛行のオスプレイの低周波で、内臓も揺れるとのお話に驚きました。

元、ハンセン病患者の方の施設も、宜野湾伝道所牧師の島田先生に案内して頂き、帰る場所もない、ご高令の方達の建物を見て、複雑な思いでした。最終日には、那覇の沖縄伝道所で島田先生の小講演をお聴きし、川越牧師夫人と教会員の方々から、おもてなしを受け、お交わりが出来、嬉しく思い感謝でした。那覇空港ロビーで解散後、私達は2泊3日の旅を続行し、空港近くのホテルに宿泊しました。翌20日(木)は、札幌で手配済みの観光タクシーで、首里城公園、糸満市にある沖縄平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館を観光し、資料館では、展示物、写真、遺品等に悲惨さを感じ、涙の観光でした。沖縄の歴史を顧み、県民は、琉球王国に支配され、明治政府に明け渡され、1945年3月末の米軍による沖縄地上戦では、20数万の死者を出し、アジア・太平洋戦争での大惨事は、想像を絶する残酷さに、この旅で改めて知り、本土復帰後45周年を迎えた今も、基地問題で苦しみ、私達は、沖縄のために何をなすべきか、重い課題を抱えて帰路に着きました。帰宅後、川越牧師からお土産に頂いた「沖縄の基地と人権問題」を熟読し、心が軽くなりました。「神の摂理が沖縄を支配していると理解します。苦難を受ければ受ける程、賜物として磨き上げられ・・・」(p24)

これからの信仰の歩みに指針を与えられ、気付きの多いツアーに参加できたことに感謝し、締め括ります。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」
～日本キリスト教会人権委員会主催
辺野古・高江抗議ツアーに参加して～
長谷川洋一（池田教会員）

人権委員会主催の辺野古・高江 抗議ツアーに参加させていただきました。このツアーに参加させていただきたいと考えたのは、「辺野古・高江抗議ツアー」という言葉に惹かれたからです。かねてから勤めの関係で、何度も沖縄の戦跡や基地のことをフィールドワーク等で学んできました。しかし、抗議ツアーには、一度も参加したことはありません。一度、抗議に参加し、体験してみたい。新基地建設の反対運動を続けておられる沖縄の人々の気持ちを共有したい。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい（ローマ12:15）」その聖書のみ言葉が心に響いてきました。辺野古の問題や高江の問題は、私は、政治問題だけではなく、根本的には、沖縄の人々の人権の問題であると考えています。

このツアーの最後には、島田善次先生が小講演、まとめとしてもお話しく下さいました。その話の中でも、沖縄の歴史においても沖縄の人々が被差別の状況にあったことを語って下さいました。私の考えていることが確認できるお話でした。

今回のツアーで私の大きな体験となったのは、私たちがこのような沖縄の人々と共に辺野古のゲート前で座り込みを抗議をすることができたことです。座り込みでの抗議とは、辺野古のキャンプ・シュワブ米軍基地ゲート横にある工事車両の出入口前で座り込み、工事車両が出入りすることに抗議の意志を表すことです。もちろんこれは非暴力が前提です。しかし、座り込み抗議という形で、はっきりと、自分の意志を表していくことも大切です。

ツアー2日目の朝、私達はこの座り込みの抗議をしました。工事車両の出入口では、機動隊の大型バスのような特型警備車が2台、そしてその真ん中に機動隊のキャラバンのようなワゴンタイプの車がおかれ、計3台の車が置かれていました。そして、その後ろの工事車両出入口前に警備保障の人々が10人ほど警備しています。また、道路を隔てた反対側には機動隊の車が1台、常に監視を続けています。座り込み抗議は、このような状況の中、機動隊の車両と道路の間、車両と車両の間の地面にブロックを置き、その上に板を引

いてそこに座ります。この日は市民等、約80名ほど集まっていました。そして、スクラムを組んでじっと抗議の意志を表すのです。道路と車の間は狭く、車もひっきりなしに走っているのもとても危険です。8時40分頃、この座り込みをしているところに多くの県警機動隊員、工事車両がやってきました。私たちが抗議の声を上げる中、機動隊員が、座り込み抗議をしている私たちのスクラムを外し、一人一人抱えたり、抱え上げたりして、ゴボウのように引き抜かれ、取り除かれていきました。

私も座り込み抗議をして機動隊に強制的に抱えられ移動させられました。さすがに私でも強制的に移動させられた気分は、よい気分とはとてもいえません。

そして、3台ある機動隊の車両の真ん中にあるワゴン車の移動がはじまり、2台の特型警備車の間を、作業用の土砂を載せたダンプカーが10台以上基地内に入っていきました。その間も座り込みをしていた人たちから大きな抗議の声が上がっていました。しかし、私は入っていくダンプカーを見るにつけ、むなしさのようなものを感じました。

このようなことが、だいたい1日に3回ほど、あるそうです。私は2日目と3日目抗議行動に参加しましたが、2日目は雨が降った中での座り込み。3日目は暑い日差しにさらされながらの座り込み抗議行動でした。また、必ず決まった時間に工事車両が来るとは限りません。3日目朝も私たちは抗議座り込みに参加しましたが、参加している間、結局、工事車両は、来ませんでした。工事車両が来るかどうか分からない、来てもいつ来るかわからない。そんな中で多くの人たちが座り込み抗議をし続けているのです。もちろん抗議する人は、交代で、入れ替わりをしているかもしれませんが、しかし、このようなことを10年あまりも、ずっと続けているのかと思うと、この座り込み抗議は、大変なご苦勞をしながらされているのだということをひしひしと感じました。この粘り強い座り込み抗議があるからこそ、なかなか辺野古に新基地の工事が進まないことも事実だと思います。

それと同時に、一方では、多くの人たちがむなしさも感じているのではないかと思います。いくら座り込み抗議をしても毎回取り除かれ、出入りする工事車両、座り込み抗議をするものにとって、基地に出入りする何台もの工事車両を見るむなしさは何ともいえません。機動隊員も命令とは

いえ、日に3回も、座り込み抗議の声を上げられている中で市民らを毎回ゴボウのように取り除いていかなければいけません。この機動隊員の労力にも多分むなしさを感じていることでしょう。しかし、これが今の沖縄の現実なのです。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい（ローマ12:15）」今回のこのツアーで、沖縄の人々と完全ではありませんが「泣くものと共に泣く」という貴重な体験の一端が出来たのではないかと思います。しかし、沖縄の人々と「喜ぶものと共に喜ぶ」ということはまだ、出来ていません。沖縄の人々が、心の底から喜べるのはいつ来るのでしょうか。

現実には、とても喜べない、希望のない状態にむかっているように見えます。多分、新基地の反対運動をされている方々にとって、工事車両が入っていくむなしさ、安倍政権の沖縄の民意を無視し続ける様子を考えると、「沖縄ではとても喜べない」という思いを強くもってしまうかもしれません。それでも聖書は「泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜びなさい」とは記さず、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい（ローマ12:15）」と「喜ぶこと」を最初に記しています。私たちにとって「喜ぶ人と共に喜ぶ」ことがどれだけ難しいことか、聖書はそのことを語っているような気がします。しかし、それと同時に沖縄の人々にとっても心から喜ぶときが必ず来る、そのように聖書は記しているのだとも思っています。でも、それはいつ来るか、私にはわかりません。

今回、講師、案内をしてくださった島田善次牧師、川越弘牧師には、一貫した新基地反対の継続した力があると感じました。その力の源になっているのは、こうした被差別におかれた沖縄の人々と連帯することが神の御心、これが神様の示された希望であると信じておられるからだとは私は考えています。そして、お二人の牧師は神の大きな力に支えられ、それによって、今もアクティブに活動が出来ているのだと感じています。



辺野古・高江抗議ツアーに参加して

久野真理子（函館相生教会員）

今年一月、「辺野古・高江抗議ツアー」の案内を受け取った時、私は4月に函館で開催する沖縄・高江「ヘリパッドいらない住民の会」の田丸

正幸さんの講演会の準備中でした。ですから、「高江へ行こう」と即、参加を決めました。

4月19日、同じ基盤に立ち、一つのことを目指す主にあるメンバーは内気な私でもすぐに親しくなり、共に学び、語らい、考えさせられることが多くあった旅となりました。特に、沖縄の地で牧師として立たされ宣教されているお二人の牧師の存在は、衝撃でした。お一人は辺野古では「団長」、高江では「島善」と呼ばれている島田善次牧師。先生の語られた忘れられない言葉がいくつもあります。抗議行動の後、深いため息をつき、つぶやいた「孤独だ」です。それは、国家に見捨てられてきた沖縄の叫び、全国の教会への訴えであり、40年前に先生との出会いがあったのにこれまで沖縄のことに深く関わってこなかった自分自身に突き刺さる言葉でした。今もずっとそのことを考えています。また、島田先生の講演中の言葉です。「石ころのようにあつかわれた。あの時は苦しかった。」「我々が日本人になって良かったなあということは一度もない。いつも悔しい思い。」「二度とだまされたらいかん。自分で考える。」「自己決定権を得ない限り、、、」。重い言葉です。400年前からの沖縄の差別と人間無視の苦しい生の歴史をずっしりと伝えられたようでした。

もうお一人は川越弘牧師です。ツアー参加前に読んだ沖縄関係の本と資料の中で、川越先生の「沖縄の基地と人権問題を考える」が、準備する上で最もふさわしいものとなりました。川越先生は抗議行動でのみなさんのアピール、島田先生、高江の伊佐育子さん、参加者、それぞれの言葉を一言も聞き漏らすまいという姿勢です。沖縄に遣わされている牧師の学びと誠実なお働きぶりがにじみでていて、静かな中に強い信念を示されました。沖縄伝道所の姉妹たちには心のこもった嬉しいおもてなしをいただきました。心から感謝を致します。

この抗議ツアーは意味のあるものでした。が、一つ心残りだったことは、参加者全員で聖書を開くことがなかったことです。信徒としてはみ言葉が与えられたいのです。

大きな経験をしました。それは辺野古、キャンプシュワブのゲート前での抗議行動です。私は必死で抵抗しました。それは圧倒的な国家権力の厚い壁に投げられた卵（村上春樹の表現）を実感した時でした。私の体は簡単に三人の警察官に運ばれてしまいました。でも、大間原発建設を一人になっても反対した故熊谷あさ子さんの存在が炉心

を200メートル移動させ、3.11後今日まで工事を止まらせた大きな要因となったという事実があります。ですからあきらめないで、また行こうと思います。共に沖縄に聞いて、学び、具体的に使える仲間が与えられることを願い、祈っています。

強盗に襲われた人を遠回りに見て見ぬふりをし、歩いたレビ人、祭司のようであったことを悔いながら。



「辺野古・高江抗議ツアー」を通して考える

吉田 雅子（札幌北一条教会員）

歴史的に苦難の道を歩いてきた沖縄。太平洋戦争後も、そして今日に至ってもその苦難は癒されることなく続いている。日本国土に存在する米軍基地の凡そ70数%を擁する沖縄。事件事故が多発し、住民たちの日常生活はいつも不安に脅かされている。そういう現実には日本の政治は基地撤去を求める住民たちの強い要望に聞く耳を持たない。世界一危険な所に位置する普天間飛行場と入れ替えに、辺野古に新滑走路を造ろうとして、既に再開工事が始まっている。

このまゝにしてよいのか、私一人がばたばたしたからとてどうにかなるものでもない。でも何か出来るとしたら？・・・と考えると、抗議の群れに加えてもらおうという気に突き押され、ツアー参加ということになった。

行動一日目。朝7時出発。レンタカーでキャンプシュワブゲート前へ。すでに他の市民グループの方々がベンチ作りをしており、私たち日キの15名もその作業の中に加わった。やがて日が上り、他の活動グループが次々と集結し、抗議の声を挙げる。住民たちは人間の鎖を作り、岩石、砂利を運んできた大型トラックの出入りを阻もうとする。然し屈強な機動隊の若者たちにあっさり鎖は解かれる。あちこちから“いたい、いたい”の叫びが聞こえてきた。

行動二日目。前日と同じく抗議の意思表示を行った。この様な活動をすることで、米軍側の建造作業を遅らせることが出来た・・・という声が囁かれていた。これがせめてもの可能な抵抗なのかも知れない・・・。「ヤマトウ」として沖縄の痛みを真にわが痛みとして捉えられるのは“いつ”なのであろうか？

[了]